

鹿児島県総合教育センター

平成27年度長期研修研究報告書

研究主題

**知的障害のある生徒のコミュニケーション
能力を育む外国語科の指導**

—高等特別支援学校版CAN-DOリストの
開発，活用を通して—

鹿児島県立鹿児島高等特別支援学校
教諭 染川 加奈子

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	1
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画	2
III	研究の実際	2
1	研究主題について	2
(1)	知的障害のある生徒に対する外国語科の指導	2
(2)	外国語学習におけるコミュニケーション能力とは	3
(3)	外国語学習における知的障害のある生徒に必要なコミュニケーション能力とは	3
2	生徒の実態調査の結果及び考察	4
(1)	概要	4
(2)	結果	4
(3)	考察	6
3	高等特別支援学校版CAN-DOリストの開発	6
(1)	CAN-DOリストとは	6
(2)	高等特別支援学校版CAN-DOリストの開発に当たって	7
4	学ぶ意欲を高め、高等特別支援学校版CAN-DOリストを効果的に活用するための授業づくりの工夫	14
(1)	ペア・グループワーク	14
(2)	多感覚学習	14
(3)	チャンツ	15
(4)	ICT機器の活用	15
5	高等特別支援学校版CAN-DOリストを活用した検証授業の実際	16
(1)	検証授業の概要	16
(2)	生徒の実態	16
(3)	検証授業Ⅰの実際	16
(4)	検証授業Ⅱの実際	19
6	検証授業後の生徒の変容と考察	26
(1)	結果	26
(2)	考察	28
IV	研究のまとめ	28
1	研究の成果	28
2	今後の課題	28

※ 引用文献・参考文献

I 研究主題設定の理由

特別支援学校学習指導要領では、生徒の障害の状態及び特性を十分考慮して、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立を図るために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことを目標としている。本校は、比較的軽度の知的障害のある生徒が通う特別支援学校として平成24年に開校した。卒業後は、多くの生徒が一般就労するため、働くために必要な力を身に付けることが大切であり、キャリア教育を中心とした教育課程を編成している。社会自立をし、豊かな生活を送るためには、周りの人とよりよく関わるコミュニケーション能力を育てることが大切である。グローバル社会と言われる現代、生徒は様々な場面で英語等の外国語に触れたり、外国人と交流したりすることもあるので、外国語科における指導においては、生徒のコミュニケーションに必要な基礎的な態度や能力を育てることが重要である。

本校生徒の実態として、英語の表現に自信がもてないことから、「自分から積極的にコミュニケーションを図ろうとすること」や「コミュニケーションを継続すること」に課題が見られる。一方、多くの生徒が、ALTとの関わりを楽しみにしており、「英語を話してみたい、外国の文化を知りたい。」など英語に対して興味・関心をもっている。外国語科の指導を通して、生徒の興味・関心を引き出し、既習の英語やジェスチャーなどを用いて、自分の考えや気持ちを相手に伝える喜びを味わわせることで、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができるようになるのではないかと考える。そのためには、知的障害のある生徒の学習特性を理解し、生徒に身に付けさせたいコミュニケーション能力を明確にし、効果的な指導方法を見いだす必要がある。

また、生徒が外国語の学習に主体的に取り組むためには、どのようなことを学ぶかを精選、明確にし見通しをもたせることが大切であり、「学習した英語を用いて何ができるか」を記したCAN-DOリストを開発、活用することが有効ではないかと考える。

このようなことから、本研究では、特別支援学校での外国語科の指導を通して、生徒の主体性の育成や英語によるコミュニケーション能力の育成を目的とした、高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発し、それを活用した授業を展開することで、生徒に英語を使って自分の思いや考えを相手に伝えられるということを実感させ、達成感を味わわせたい。そうすることにより、生徒の学習意欲を高め、自らコミュニケーションを図ろうとする生徒を育成できるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

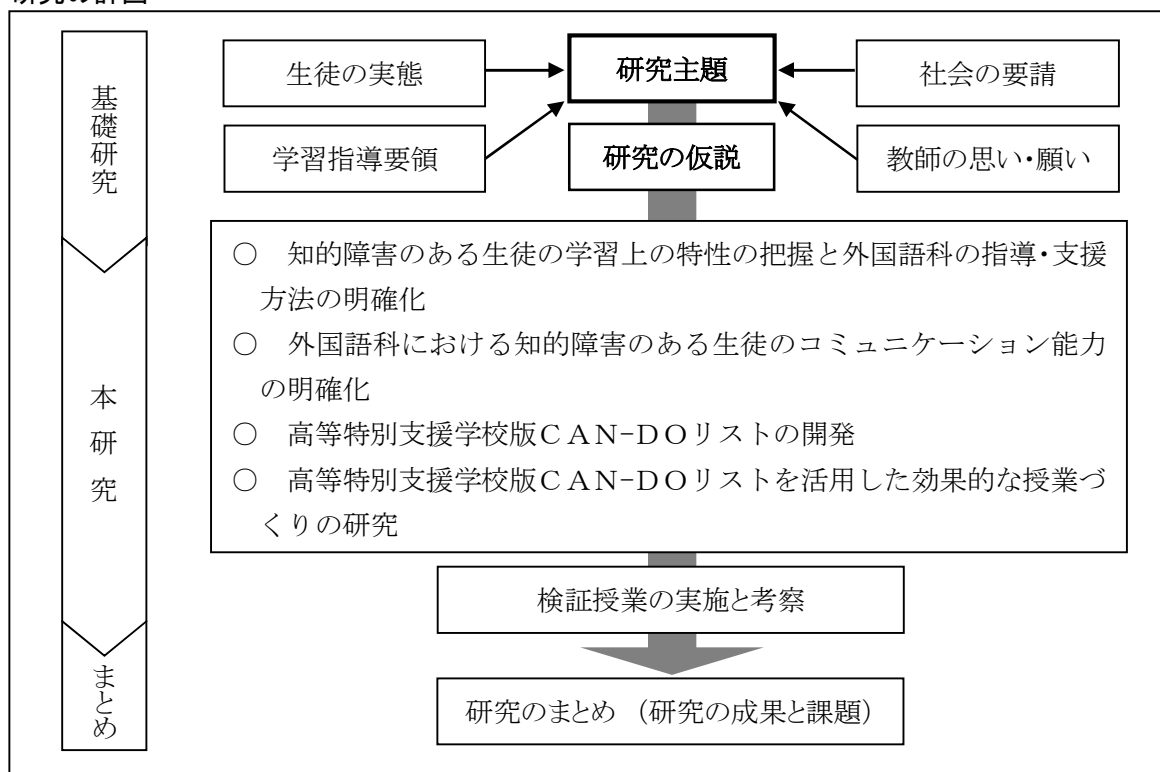
1 研究のねらい

- (1) 学習指導要領や先行研究、文献を基に、知的障害のある生徒の学習上の特性に応じた外国語科の指導・支援方法を明らかにする。
- (2) 生徒に身に付けさせたいコミュニケーション能力を明らかにし、高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発する。
- (3) 高等特別支援学校版CAN-DOリストを活用した効果的な授業の在り方を探る。
- (4) 検証授業を通して、成果と課題を整理し、今後の実践に生かしていく。

2 研究の仮説

知的障害のある生徒の外国語科の指導において、高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発し、教師と生徒が共有し、リストを活用するための授業づくりを工夫すれば、生徒の学ぶ意欲を高め、コミュニケーション能力を育成することができるのではないかと考える。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題について

(1) 知的障害のある生徒に対する外国語科の指導

ア 外国語科の意義

特別支援学校高等部の外国語科では、「生徒が外国の人とコミュニケーションを図るために簡単な外国語での表現を聞いたり、話したり、一緒に活動したりすることができるようになることを通して、日本以外の国や日本語以外の言葉への関心を深めること^{*1)}」を目標にしている。内容としては、主として簡単なコミュニケーションの指導を通して、外国や外国語への関心を深めることを重視しており、ALTなどの外国人との関わりを通して直接外国語に触れ、実際にコミュニケーションを図ることが大切である。また、日常生活の中で、外国語に多く触れ、実際に使う体験をすることが必要である。

イ 目標

外国語科の目標は次のように示されている。

外国語でコミュニケーションを図る基礎的な能力や態度を育てるとともに、外国語や外国への関心を深める。

ウ 内容

内容は「英語」で「会話」、「読む・書く」及び「語や句、文の意味」の三つの観点から基礎的な内容と発展的な内容の2段階で示している。各段階の内容は以下のとおりである。

1段階 (1) 簡単な英語を使って表現したり、やりとりしたりする。
(2) 簡単な語、句、文に興味や関心をもつ。
(3) 日常生活の中で見聞きする語や句の意味を知る。

2段階 (1) 初歩的な英語を使って簡単な会話をする。
(2) 簡単な語、句、文を書いたり読んだりする。
(3) 簡単な語、句、文の意味を知る。

*1) 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領総則等編 (高等部)』 平成21年 海文堂出版

指導に当たっては、学習指導要領における外国語科の目標を踏まえ、生徒の実態に合わせて、適切な授業を創意工夫する必要がある。その際、「生徒が学習したことを、実際の生活に役立てることができるように」身近な話題や場面を取り上げたコミュニケーション活動を通して、段階的に指導する必要がある。本校では、卒業後の社会参加を目指しており、外国語も週時程に位置付け週1単位の時数を確保している。1単位時間の授業の中で、前述の内容については、コミュニケーションを重視した活動の中で扱い、積極的にコミュニケーションを図ることができる生徒の育成を目指している。

(2) 外国語学習におけるコミュニケーション能力とは

外国語学習におけるコミュニケーション能力とは、Canal and Swain(1980)の定義が広く知られており、その定義によるとコミュニケーション能力は以下の構成要素からなる。

表1 コミュニケーション能力の構成要素

文法的能力	語彙、形態、統語、意味、音韻面にわたって文法的に正しく言語を操ることができる能力。「文」を文法的に正しく理解し、作り出すことができる能力。「正確さ」に関わる能力。
社会言語学的能力	相手によって依頼表現を変えるとといった、社会文脈での適切性を考慮できる能力。具体的には「何を言うか」(what to say)と「どのように言うか」(how to say)を適切に判断できる能力。
談話能力	意味のつながりや論理の一貫性を考慮しながら、まとまりのある発話や文章を構成したり、理解したりできる能力。
方略的能力	文法的能力・社会言語学的能力・談話能力のコミュニケーション能力の不備を補うために、様々な方策を用いることができる能力。具体的には、「ジェスチャー」、「聞き返し」、「繰り返す」、「再確認」、「言い換え」などが考えられる。方略的能力は、コミュニケーションを維持するためには、欠かせない能力。実際のコミュニケーションに関わる能力。

(3) 外国語学習における知的障害のある生徒に必要なコミュニケーション能力とは

大城(2008)は、コミュニケーション能力の発達段階と表1の4構成要素との関連を図1のように、「逆さピラミッド型」で示しており、発達段階が進むにつれて、コミュニケーション能力に占めるそれぞれの構成要素の割合は変化するものであると捉えている。それによると、学習の小学校・中学校段階では、方略的能力の占める割合が大きいことが分かる。

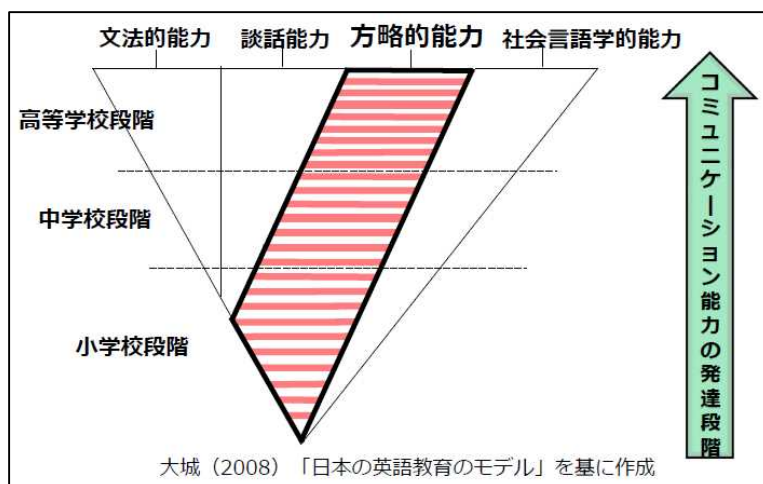


図1 コミュニケーション能力の発達段階と構成要素との関連

村野井(2006)は、「方略的能力は、コミュニケーションを進める上で自分の能力が原因で何らかの障害が現れたときに、それを乗り越えながらコミュニケーションを続けることを可能にする能力である。*2)」と述べている。文法や語彙の知識が少ない状況で、コミュニケーションを継続するためには、表現方

*2) 村野井 仁 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 2006年 大修館書店

法を工夫したり、非言語的な手段を用いたりすることが必要である。ジェスチャーや繰り返し、聞き返しなどの方略的能力は、コミュニケーション能力を構成する重要な能力の一部である。

さらに、方略的能力は、学習指導要領の目標である「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことに深く関わっており、学習指導要領に示されているコミュニケーション能力の中の一つとして極めて重要であることが分かる。

知的障害のある生徒は、相手の話した内容がよく理解できなかつたり、自分が話そうとする内容を言葉で思うように表現できなかつたりすると、コミュニケーションを続けることを諦めてしまうことがある。しかし、語彙や英語表現などが分からないことを理由に、コミュニケーションを中断させてしまうのではなく、表現方法を工夫したり、様々な手段を使ったりして、自分の意思を伝えようとするのが大切である。Savignon(1983)によると、表1の4構成要素が統合されて初めて完全なコミュニケーション能力になると言われているが、語彙や英語での表現が学習の初期段階にある知的障害のある生徒の外国語学習においては、特に方略的能力を育むことが重要になると考える。

2 生徒の実態調査の結果及び考察

(1) 概要

ア 目的

英語に関する興味・関心及びコミュニケーション能力に関する生徒の実態を調査することにより、学習指導上の課題を把握し、実態に基づいた高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発するとともに、リストを効果的に活用する指導方法を明らかにする。

イ 対象

鹿児島高等特別支援学校 第2学年 31人

ウ 時期

平成27年6月上旬

エ 方法

質問紙法

オ 内容

(ア) 英語に関する興味・関心や理解の状況に関すること

(イ) 英語によるコミュニケーションに関すること

(2) 結果

ア 英語や英語の授業に関する興味・関心や理解の状況に関すること

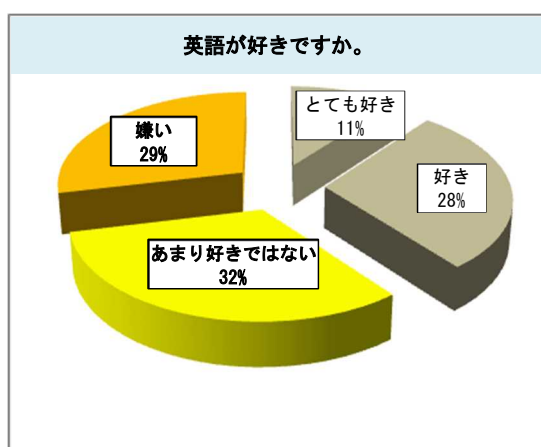


図2 英語への興味・関心

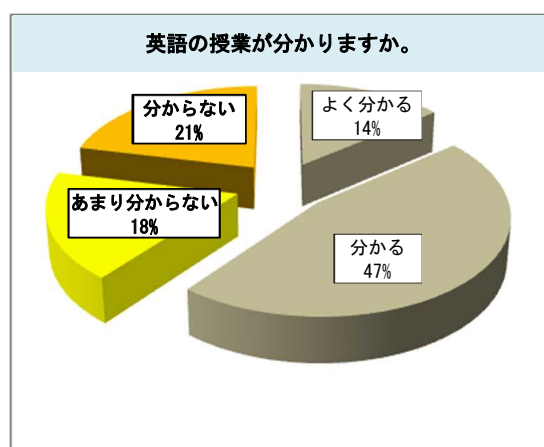


図3 英語の授業の理解

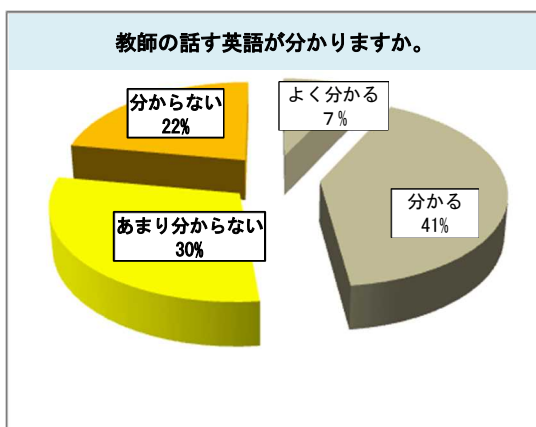


図4 教師の話す英語の理解

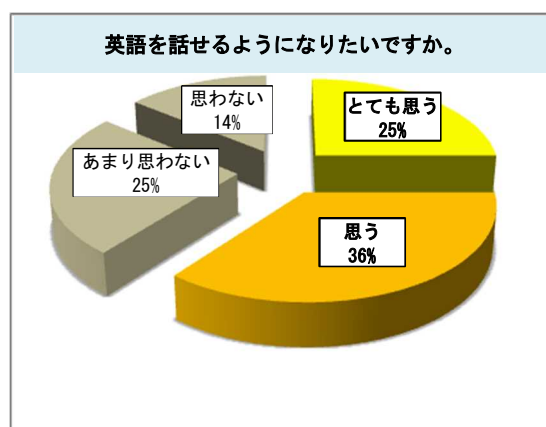


図5 英語を話したいという意欲

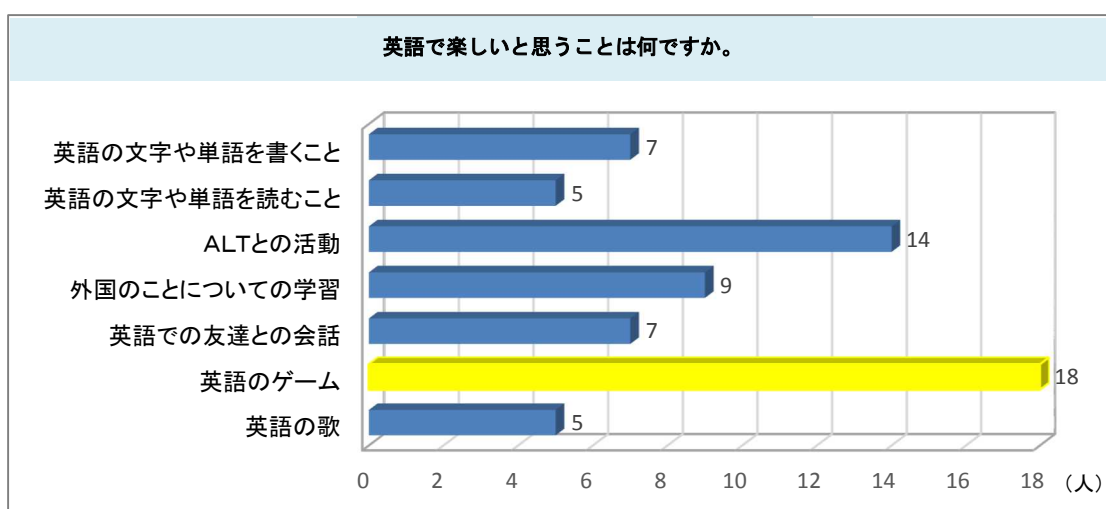


図6 英語の授業での楽しい活動

英語や英語の授業に関する興味・関心や理解の状況に関する実態調査において、61%の生徒が、英語が好きではない(図2)と回答している。また、39%の生徒が授業が分からない(図3)、52%の生徒が、教師の話す英語が分からない(図4)と回答している。その一方で、61%の生徒が英語を話せるようになりたいと思っていることも分かる(図5)。また、多くの生徒が、英語の授業で楽しいことは、英語のゲームとALTとの活動を挙げている(図6)。

イ 英語によるコミュニケーションに関すること

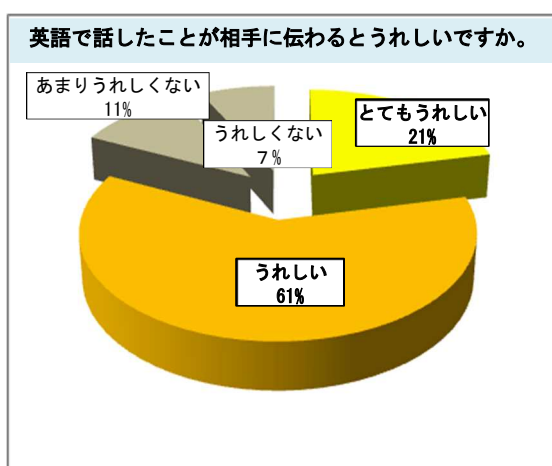


図7 英語が伝わることの喜び

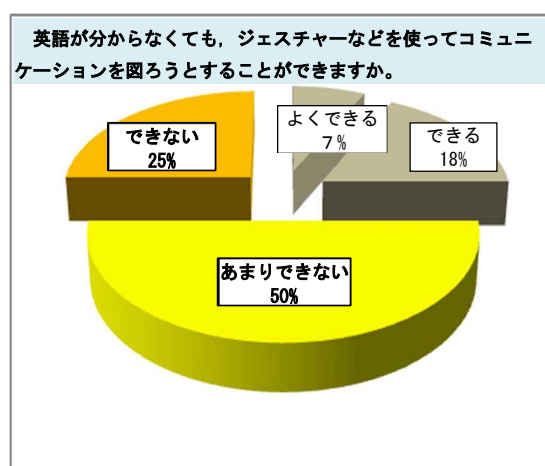


図8 コミュニケーションへの積極性

英語によるコミュニケーションに関する実態調査において、82%の生徒が、英語で話したことが相手に伝わるとうれしいと回答している（図7）。また、75%の生徒が、英語が分からなくても、ジェスチャーなどを交え、コミュニケーションを図ろうとすることはできないと回答している（図8）一方、86%の生徒が、その大切さを認識していることが分かる（図9）。

(3) 考察

実態調査から、英語や英語の授業に対して、苦手意識をもっている生徒が多く、興味・関心を抱けずに、授業や教師が話す英語を理解できないという状況が見られる。そのため、生徒に興味・関心をもたせ、苦手意識を軽減できるような授業を展開すれば、授業の理解も促進されるのではないかと考える。

次に、英語によるコミュニケーションに関することについては、ほとんどの生徒が、コミュニケーションの大切さは理解できているが、コミュニケーションを継続させる方法が分からなくて、会話が中断してしまったり、続かなかったりする現状がうかがえる。基本的な会話のパターンを身に付けるとともに、たとえ英語の語彙や表現が分からなくても、ジェスチャーなどの方略的能力を駆使することにより、コミュニケーションを継続することができれば、生徒自身が、自らの考えや思いを相手に伝える喜びや、達成感を味わうことができ、より英語を話したいという意欲の向上につながるのではないかと考える。そのためにも、CAN-DOリストを開発し、到達目標をしっかりと捉え、授業を設計し、活用を図っていくことが、生徒の学ぶ意欲を高め、コミュニケーション能力を身に付けさせるために効果的ではないかと考える。

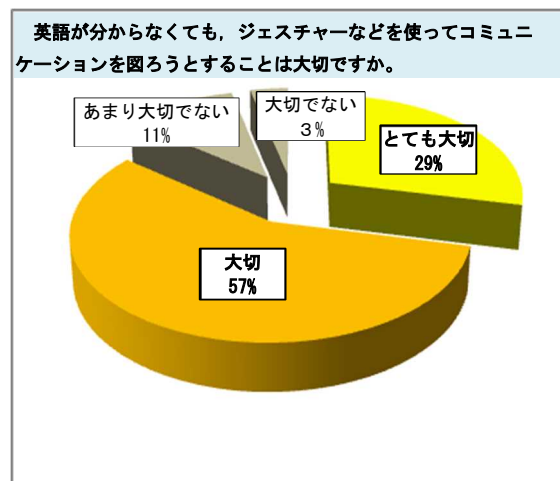


図9 コミュニケーションの大切さに関する認識

3 高等特別支援学校版CAN-DOリストの開発

(1) CAN-DOリストとは

CAN-DOリストとは「英語を用いて何ができるようになるか」という視点で学習到達目標を設定し、リスト化したものである。英語を始めとした外国語は、グローバル社会を生きる我が国の子供たちの可能性を大きく広げる意味で重要なものであるが、日本では英語が義務教育化されているにもかかわらず、卒業時に「英語を実際に話せる学生」が少ないことが問題視されてきた。そのような状況を改善するために、文部科学省は「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形で学習到達目標設定のための手引き」（平成25年3月）で、CAN-DOリストの作り方、到達目標の設定の仕方、活用方法などを示した。これらを基に、各学校において、CAN-DOリストを作成し、授業づくりを行っていくことが大切であると提言している。

「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を設定する目的は、外国語でコミュニケーション能力を育むために、生徒が身に付ける能力を明らかにし、教師が生徒の指導と評価の改善に活用することである。目標を「英語を用いて～することができる」という記述にし、実生活で活用できるコミュニケーション能力を育成することを目指した指導を行っていくことをねらいとしている。評価も「実際にできるようになったか」を評価することになり、指導と評価の一体化を図ることができる。また、教師と生徒が学習到達目標を共有することも目的の一つである。目標を共有することで、生徒自身も、言語を用いて、「～ができるようになりたい」、「～ができ

るようになることを目指す」といった自覚が芽生え、「～ができるようになった」という達成感による学習意欲の更なる向上にもつながると考える。

CAN-DOリストは、CEFR-J（表2）を基に作成する。CEFR-Jは、CEFR、いわゆる「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）」をベースに、日本の英語教育における利用を目的に構築された、英語能力に関する到達度指標である。CEFRは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、多くの項目を提供している。

表2 CEFR-JのSpoken Interactionの例（話すこと）

Pre-A1	極めて限定的な日常の挨拶と意思の伝達
A1	学校生活での会話導入
A2	学校以外の社会生活での会話が導入され
B1	さらに広い社会生活での会話
B2	抽象的な議論のできる能力
C1	抽象度のほかに流暢性
C2	幅広い慣用表現と議論できる力、自分の英語力をモニターし、取り繕う能力

(2) 高等特別支援学校版CAN-DOリストの開発に当たって

ア 高等特別支援学校版CAN-DOリストの概要

知的障害のある生徒の学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことなどが挙げられる。このような特性を踏まえ、高等特別支援学校の生徒が、主体的に英語を使ってどのようなことができるのか、また、どのようなことをできるようになりたいのかを考え、高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発した。

リストは、生徒にとって使えるリストであることが大切である。そこで、開発に当たっては、教える側のCAN-DOリスト（表4、表5、表6）を開発した後、学習者にとって、分かりやすい表現や、イラストなどを挿入した学ぶ側のCAN-DOリスト（図12、図13、図14）を開発した。生徒の学習上の特性や学習指導要領、生徒の課題などを踏まえて開発した高等特別支援学校版CAN-DOリストの特徴は以下の3点である。

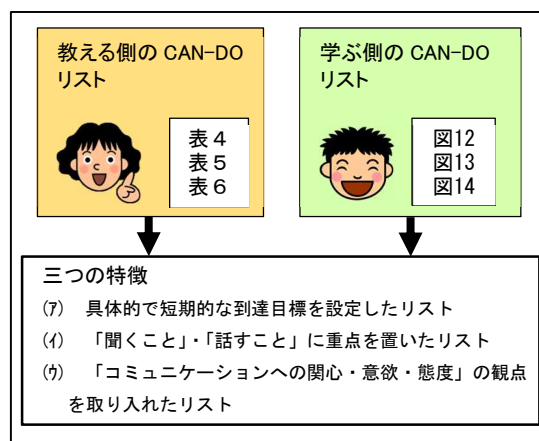


図10 高等特別支援学校版CAN-DOリストの概要

(ア) 具体的で短期的な目標達成に重点を置いたリスト

知的障害のある生徒は、抽象的理解が苦手であり、知識が断片的になりやすく、長期目標を保持し、学習意欲を持続させることが難しいところがある。1単位時間の学習の中で、英語でコミュニケーションを図ることに自信をもち、達成感を得られるよう、より実生活に結び付いた具体的で短期的な目標達成に重点を置いたリストである。

(イ) 「聞くこと」・「話すこと」の領域に重点を置いたリスト

知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校高等部の外国語科では、生徒が外国の人とコミュニケーションを図るために簡単な外国語での表現を聞いたり、話したり、一緒に活動したりすることができることを通して、日本以外の国や日本語以外の言葉への関心を深めることを目標にしている。具体的には、身近な生活場面でよく使う語、句、文を使って意思を表現したり、互いの意思を伝え合ったりするなど、簡単な英語を使用してやり取りをしたり、初歩的な英語を使って簡単な会話をしたりすることである。そこで、CAN-DOリストは、「聞くこと」・「話すこと」の領域に重点を置いたリストである。

(ウ) 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点を取り入れたリスト

文部科学省の「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」(平成25年3月)では、外国語科における観点別学習状況の評価のうち、特に「外国語理解の能力(聞くこと・読むこと)」及び「外国語表現の能力(話すこと・書くこと)」の観点からCAN-DOリストを作成し、指導と評価に活用することにより、外国語教育の指導と評価の改善につながる効果が期待できるとされている。しかし、先述したように、知的障害のある生徒の外国語学習においては、方略的能力を育むことを重視することから、これらの観点に加え「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点も考慮したリストであり、コミュニケーションへの積極的な取組を期待した。

イ 高等特別支援学校版CAN-DOリストの開発手順

高等特別支援学校版CAN-DOリストを図11の手順で開発した。

(ア) 教える側のCAN-DOリスト

① CEFR-Jの検討

定期考査やインタビューテストなどから把握した本校生徒の実態と特別支援学校高等部学習指導要領を参考に、CEFR-JのPre-A1からA2の範囲でCAN-DOリストを開発することが妥当であると考え、その一部を選択した。表3は、CEFR-Jから参照した、本校生徒に卒業までに身に付けてほしい行動目標をリスト化したものである。

② 生徒の実生活に結び付いたCAN-DOリスト

生徒の実生活に即し、身近な話題に関して、なじみのある語彙や表現を用いて達成できるような目標を具体化した。高等特別支援学校版CAN-DOリストの概要でも述べたように、「聞くこと」・「話すこと」に関する、

具体的で短期的な目標達成に重点を置いたリスト(表4)、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点を取り入れたリスト(表5)を開発した。その際、教える側のリストであるため、文末表現は、「～することができるようにする」とした。

③ シラバスの見直し

学習した英語で「～することができる」ようにするために、開発した②のリストと既存のシラバスと照らし合わせて、CAN-DOリストの形で設定した到達目標を3年間のシラバスに位置付けた。

④ 学年毎の具体的な指導目標の精選

開発した②のリストの目標に到達できるように、どのような時期にどのような能力を身に付けさせていけばよいかを具体的に考え、英語を使ってできることをどのような言語活動と関連付けるかなどを整理し、学年毎に具体的なリスト(表6)を作成した。

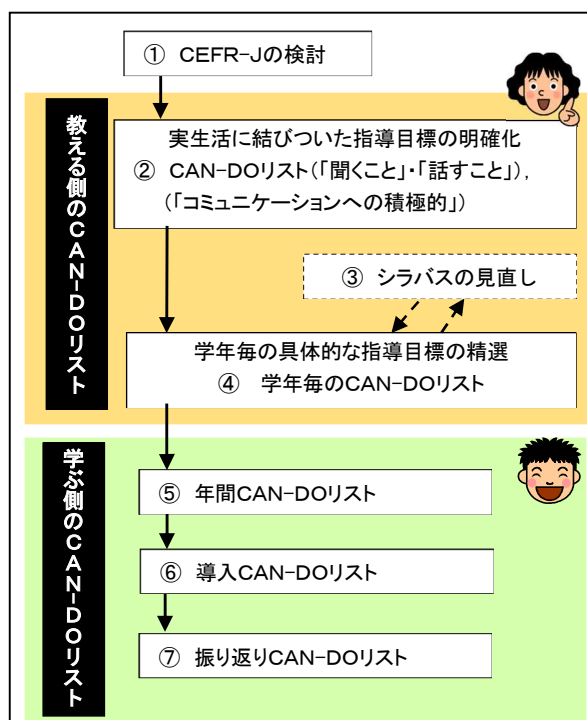


図11 高等特別支援学校CAN-DOリスト開発手順

(4) 学ぶ側のCAN-DOリスト

開発した教える側のCAN-DOリストを基に、イラストや分かりやすい表現を用いて、生徒に学習意欲や具体的な学習目標をもたせることができるようなリストを開発した。学ぶ側のリストであるために、文末表現は、「～できる、分かる」とした。

⑤ 年間CAN-DOリスト (図12)

年度初めに、生徒が英語を用いてどのようなことができるかを示したリストを開発した。学習の終末時には、できるようになったことを色塗りすることで、達成感を実感し、自信をもてるようなリストとした。

⑥ 導入CAN-DOリスト (図13)

授業の導入時に、単元や1単位授業の中で、どのようなことができるようになるか、期待感をもてるようなリストとした。

⑦ 振り返りCAN-DOリスト (図14)

1単位時間の終末で、どのようなことができるようになったかを振り返ることができるリストを開発した。そうすることで、達成感や成就感につながり、次の学習に対して意欲が高まり、コミュニケーション能力が育成されると考えた。「できない」を感じるのではなく、「できる」または、「できるようになりつつある」を感じるようなリストにした。そのために、生徒が理解できるような具体的表現を使ったり、4段階に分けたイラストを入れたりするなどの工夫をした。

表3 ① CEFR-Jの尺度から抜粋した、本校生徒に身に付けてほしい行動目標

理 解	聞 く こ と	I	ゆっくりはっきり話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる。	
		II	英語の文字が発音されるのを聞いてどの文字か分かる。	
		III	ゆっくりはっきり話されれば、短い簡単な指示を理解することができる。	
		IV	日常生活に必要な情報(数字・品物・値段・日付・曜日・・・)を聞きとることができる。	
		V	身近なトピックに関する話をゆっくりはっきり話されれば、理解することができる。	
	読 む こ と	I	アルファベットの大文字・小文字が分かる。	
		II	日付や曜日を見て理解できる。	
		III	「駐車禁止」、「飲食禁止」等の日常生活で使われる短い簡単な看板や標識の指示を読み、理解することができる。	
IV		レストランの絵や写真がついたメニューを理解し、選ぶことができる。		
表 現	話 す こ と	や り と り	I	基礎的な語句を使って、「助けて!」や「～が欲しい」などの自分の要求を伝えることができる。
			II	日常の挨拶や季節の挨拶をしたり、そうした挨拶に応答したりすることができる。
			III	なじみのある定型表現を使って、(時間・日にち・場所など)について質問したり、質問に答えたりすることができる。
			IV	個人的なトピック(家族・日課・趣味など)について質問したり、質問に答えたりすることができる。
	発 表		I	簡単な語や基礎的な句を用いて、自分についてのごく限られた情報(名前・年齢など)を伝えることができる。
			II	前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物を見せながら、その物を説明することができる。
	書 く こ と		I	アルファベットの大文字・小文字を書くことができる。
			II	単語のつづりを1文字ずつ発音されれば、聞いてそのとおりに書くことができる。
			III	住所・氏名などの項目がある表を埋めることができる。
			IV	自分について基本的な情報(名前・住所・家族など)を辞書を使えば短い句または文で書くことができる。
			V	簡単な語や基礎的な表現を用いて、身近なことについて短い文章を書くことができる。

表4 ② CAN-DOリスト（「聞くこと」・「話すこと」）

聞くこと	I	ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞きとることができる。	1	季節 形 色 教科 食べ物 スポーツ 動物 建物 方向などの語彙を理解できるようにする。		
			II	1	アルファベットの音を聞いて、どのアルファベットが分かるようにする。	
				2	フォニックスの音を聞いて、どのアルファベットが分かるようにする。	
			III	ゆっくりはっきり話されれば、短い簡単な指示を理解することができる。	1	簡単なクラスルームイングリッシュを理解でき、反応できるようにする。
			IV	日常生活に必要な重要な情報（数字・品物の値段・日付・曜日など）をゆっくりはっきり話されれば、聞きとることができる。	1	100までの数字を聞いて分かるようにする。
	2	曜日や日付の質問を聞いて分かるようにする。				
	3	天候の話題について理解できるようにする。				
	4	年齢に関する質問を理解できるようにする。				
	5	時刻を聞きとることができるようにする。				
	V	身近なトピックに関する話をゆっくりはっきり話されれば、理解することができる。	1	簡単な挨拶を聞いて分かるようにする。		
			2	買い物の場面での質問や会話を聞いて分かるようにする。		
			3	好き嫌いに関する質問や会話を聞いて分かるようにする。		
			4	やさしい道案内を聞いて分かるようにする。		
			5	人や物の位置を聞いて分かるようにする。		
			6	留守番電話のメッセージを聞いて分かるようにする。		
話すこと	やりとり	I	基礎的な語句を使って、「助けて!」や「～が欲しい」などの自分の要求を伝えることができる。	1	自分の欲しい物を伝えたり、尋ねたりすることができるようにする。	
				II	日常の挨拶や季節の挨拶をしたり、そうした挨拶に回答したりすることができる。	1
		2	謝ったり、お礼を言ったりすることができるようにする。			
		III	なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる。	1	天候に関する質問をしたり、答えたりすることができるようにする。	
				2	日にちの質問をしたり、答えたりすることができるようにする。	
	3			時間に関する質問をしたり答えたりすることができるようにする。		
	IV	家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて質問したり、質問に答えたりすることができる。	4	場所を尋ねたり、道案内をしたりすることができるようにする。		
			1	誕生日に関する質問をしたり、答えたりすることができるようにする。		
			2	年齢について質問をしたり、答えたりすることができるようにする。		
			3	好き嫌いを質問したり、答えたりすることができるようにする。		
			4	できることを尋ねたり、答えたりすることができるようにする。		
	5	行きたい国について尋ねたり、答えたりすることができるようにする。				
	発表	I	簡単な語や基礎的な句を用いて、自分についてのごく限られた情報（名前・年齢など）を伝えることができる。	1	簡単な自己紹介（名前・年齢・出身地など）ができるようにする。	
				II	前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物を見せながら、その物を説明することができる。	1
		2	家族や友達の名前、出身、好きな物などを紹介することができるようにする。			
3		自分の好きな物や嫌いな物を紹介できるようにする。				
4		自分ができることやできないことを紹介できるようにする。				
5	自分の行きたい国について紹介できるようにする。					

表5 ② CAN-DOリスト（「コミュニケーションへの積極性」）

コミュニケーション	1	相手と目を合わせながらやりとりをすることができるようにする。
	2	笑顔でやりとりをすることができるようにする。
	3	相手に伝わるように、はっきりとした声で伝えようとするようにする。
	4	相手に伝わらないときに、英語を繰り返して、言いたいことを伝えようとするようにする。
	5	うまく英語で言えないときに、日本語を交えながら、伝えようとするようにする。
	6	聞き取れないときに、もう一度繰り返して言ってもらえるようにするにすることができるようにする。
	7	もう少しゆっくり話してくれるように、頼むことができるようにする。
	8	ジェスチャーを使って、言いたいことを伝えることができるようにする。
	9	会話を続けるために、うなずいたり、語彙を繰り返したりすることができるようにする。
	10	分からないことや不明なことを質問できるようにする。
	11	言いたいことが伝わらないときに、他の単語や表現を使って言い換えることができるようにする。

表6 ④ 学年毎のCAN-DOリスト（1年）

月	1年	聞くこと	読むこと	話すこと		書くこと	
				やりとり	発表		
4月	CAN-DO リストチェック						
	あいさつをしよう	Ⅲ-1		Ⅱ-1			
	あいさつをしよう						
5月	アルファベットクイズを作ろう	Ⅱ-1	Ⅰ				
	アルファベットクイズを作ろう						
	数を数えよう	Ⅳ-1					
数を数えよう							
数を数えよう							
6月	気持ちを伝えよう			Ⅱ-2			
	気持ちを伝えよう						
	校内実習						
7月	今日の天気は何だろう	Ⅳ-3		Ⅲ-1			
	今日の天気は何だろう						
	ALTの先生のことを知ろう	Ⅴ-1		Ⅱ-1			
9月	前期期末考査						
	好きな物を紹介しよう			Ⅱ-3			
	好きな物を紹介しよう						
好きな物を紹介しよう							
10月	好きな物を紹介しよう			Ⅰ-1			
	欲しい物を伝えよう						
	欲しい物を伝えよう						
11月	ハロウィンクイズに挑戦しよう			Ⅰ-1			
	欲しい物を伝えよう						
	現場実習						
12月	いろいろなサインを知ろう		Ⅲ				
	クイズを作ろう（人・動物編）	Ⅰ-1			Ⅳ-3		
	クイズを作ろう（人・動物編）						
1月	クリスマスソングを歌おう						
	電話で伝えよう（形編）	Ⅰ-1					
	電話で伝えよう（形編）						
電話で伝えよう（形編）							
2月	自分の宝物を紹介しよう			Ⅱ-2			
	自分の宝物を紹介しよう						
	インタビューテストに向けて						
3月	インタビューテスト						
	学年末考査						
	CAN-DO リストチェック						

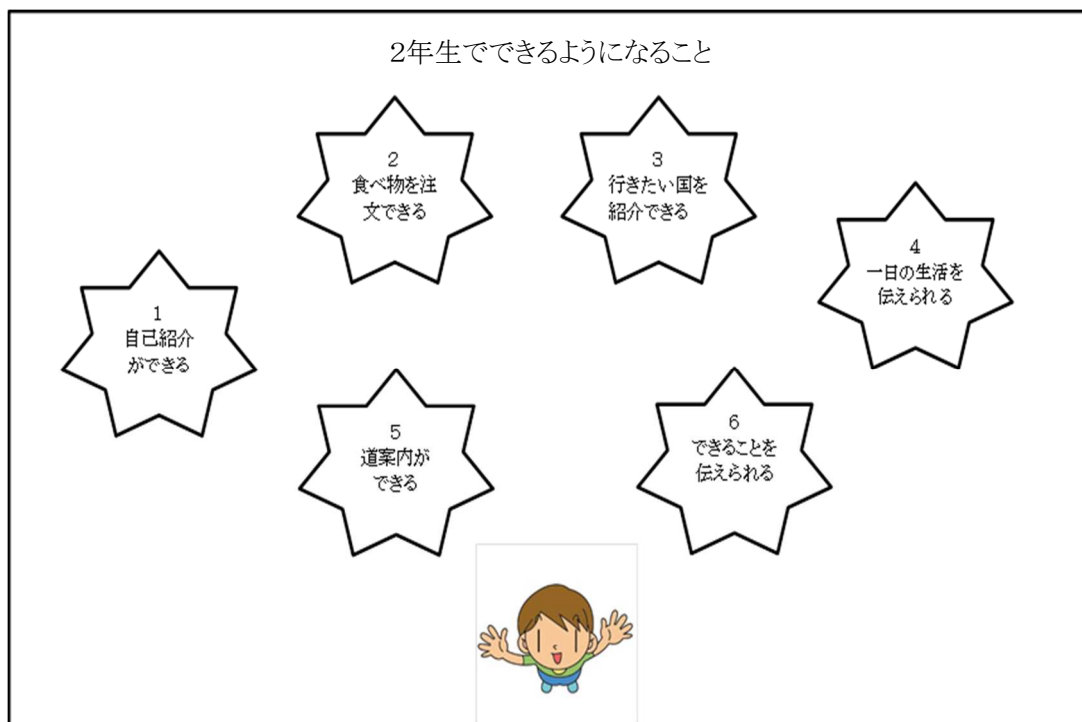


図12 ⑤ 年間CAN-DOリスト（2年生）


図12の年間CAN-DOリストは、年度初めに提示する。そうすることにより、生徒に年間の見通しや期待感をもたせることができる。各単元の終末時には、できるようになったことには色を塗らせるなどして、学習に対する振り返りをさせることで、達成感や自信をもたせることができる。

		とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	自信がない
話す	道案内ができる。				
	やさしい道案内を聞いて分かる。				
聞く	建物の名前を聞いて分かる。				
	アイコンタクトをとることができる。				
コミュニケーション	笑顔でやり取りできる。				
	はっきりした声で話すことができる。				
	聞き取れないときに聞き返すことができる。				



図13 ⑥ 導入CAN-DOリスト（例）

図13と図14は、1単位授業の中で提示する。導入CAN-DOリスト（図13）で、どのようなことができるのか、見通しや期待感をもたせることができる。また、振り返りCAN-DOリスト（図14）で、どのようなことができるようになったかを明確にし、達成感を味わわせることができる。

友達の言った道案内を聞き取り、目的地へたどり着くことができましたか。

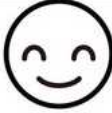



スタートから正確に聞き取ることができた	スタート近くの場所だったら聞き取ることができた	手で示してもらったと、聞き取ることができた	まだむずかしい
			

机で作った道や、ホワイトボードにはった地図で、友達と道をたずねたり、案内したりすることができましたか。

スムーズに道をたずねることや案内することができた	ゆっくりなら道をたずねることや、案内することもできた	道をたずねることはできた	まだむずかしい
			

今日のコミュニケーションへの積極性はどうか。

聞き返し・アイコンタクト・スマイル・はっきりした声

4つとも全部できた	3つはできた	2つならできた	1つ以下
			

できるようになったことや、気を付けたこと、これからの目標を書きましょう。

NAME ()

図14 ⑦ 振り返りCAN-DOリスト (例)

4 学ぶ意欲を高め、高等特別支援学校版CAN-DOリストを効果的に活用するための授業づくりの工夫

CAN-DOリストの到達目標を実現するためには、リストを授業で活用しなければならない。リストに記載していることが単なるスローガンにならないように、教師は「できるようにすること」を明確にし、それを生徒が「できる」と感じるような授業を設計していく必要がある。

授業を進めるに当たって、開発したCAN-DOリストを効果的に活用し、生徒の学ぶ意欲を高め、コミュニケーション能力を育む授業にするためには、以下の4点の工夫が効果的であると考えられる。

(1) ペア・グループワーク

コミュニケーション能力を育てるためには、人と関わる体験が必要である。Vygotsky(1978)は、インタラクションによる生徒の発達の可能性を重視している。生徒が自分の実際の発達レベルから、一人では到達できない一つ上の発達レベルに至る最近接発達領域の中にいるとき、インタラクションの中で教師や他の生徒から補助や支援を受けることができれば、上のレベルに到達できるとしている。「インタラクション」とは、言語を使って、他の対話者と情報のやり取りなどの意思伝達をすることを意味する。インタラクションの有効な方法として、ペアワークやグループワークがある。ペア・グループワークによるインタラク



写真1 グループで助け合いながら文を完成させている姿

ションを通して、自分では解決できないことも、友達の助けによりできるようになり、学習した英語を繰り返し使用することで、やがて一人でもできるようになると考える。このようにペア・グループワークを行うことで、学習した言語知識を用いて、互いに自分の意思が相手に伝わるように話したり、相手の話すことを理解しようとしたりすることができるようになっていく。

高等特別支援学校版CAN-DOリストは、「聞くこと」・「話すこと」の領域に重点を置いていることから、ペア・グループワークでのインタラクションは、到達目標を達成するのに、効果的な学習方法である。

また、知的障害のある生徒にとって、「話したい」、「聞きたい」と思えるトピックを用いることで、インタラクションを活性化することができると思う。知的障害のある生徒の学習上の特性から考えると、トピックは、具体的で、日常生活になじみのある、生徒のニーズに合ったものを設定した上で、ペアワークやグループワークによるコミュニケーション活動を行うことが大切である。そうすることで、相手意識が生まれ、方略的能力を使う必要性を感じ、コミュニケーション能力を育むことができると思う。

(2) 多感覚学習

学習につまずきのある生徒の中には、聴覚情報の処理または、視覚情報の処理、あるいは、その両方に苦手さを抱えている生徒がいる。生徒にとって苦手な方法で指導すると、達成感や成成感を得られにくく、コミュニケーション能力を育む前に、英語嫌いを増やしてしまうことになる。彼らの得意な認知処理方法を活用しやすいうように、全ての感覚を使えるような指導方法を意識しなければならない。視覚、聴覚、運動は情報を取り込む際に大切な感覚である。語彙や表現を覚える際に、幾つかの感覚を組み合わせることによって、彼らの感覚を刺激し、情報のインプットを促すことができる。例えば“wet”のような形容詞を導入する際に、中身が見えない袋に何か濡れた物を入れ、言葉で説明せずに、触らせ、感覚的に理解させる。また、道

案内では、アイマスクをし、聴覚に集中させて、実際に体を動かしながら確認させる。そうすることで、生徒の関心を引き付け、感覚に訴えることができ、高等特別支援学校版CAN-DOリストで設定した具体的で短期的な目標を達成させるために必要な語彙や表現の定着を促すことができる。その際どの感覚を使った学習方法が合っているかは、生徒一人一人を観察しなければならない。WISC-IIIなどの心理検査結果から分かることもあるが、どの学習方法がよいかが一番分かりやすい方法は、生徒が「楽しい」と感じる方法を探り、生徒の意見を取り入れながら改良し、生徒のニーズに合った方法で実践していく方法がよいのではないかと考える。



写真2 動作や聴覚などの感覚を使った活動

(3) チャンツ

チャンツとは、日常的な場面での話し言葉をリズムに乗せて表現したものである。単調で退屈になりがちな反復練習も楽しく感じ、何度も繰り返すことで、単語や表現に慣れ親しみ、表現を容易に習得することができる。授業においては、具体的で短期的な目標をCAN-DOリストで設定するので、チャンツの活用はその目標達成に不可欠な語彙や英語表現を効果的に身に付けることに役立つ。また、チャンツのリズミカルな英語を何度も聞き、リズムに乗って何度も繰り返すうちに、英語の発音で重要なイントネーションなど、英語に特徴的に見られる音やリズムを自然に身に付けることができるので、聞く力・話す力の育成にも効果的である。さらに、授業の雰囲気づくりや、ウォームアップにも大変有効である。知的障害のある生徒もリズム遊びを好む傾向があり、これまでに何度も、自然に体でリズムをとりながら、楽しんでいる姿を見ることができた。また、集中が途切れ、活動に飽きやすい生徒にとって、リズムやテンポを変えることで、集中させることができる。知的障害のある生徒においても、チャンツを取り入れることは、学習活動への意欲を高めることに有効であると考えられる。

(4) ICT機器の活用

知的障害のある生徒の中には、文字情報の処理が得意な生徒やイメージの処理が得意な生徒などいろいろな特性をもった生徒がいる。それらに対応するためにも、ICT機器を活用することは、文字を含めた視覚情報を提示することなどに有効であり、資料を次々と提示したり、モデルを比較したり、時間を掛けずに十分な視覚情報を与えることができる。『平成26年度文部科学白書』*3)には、「教育におけるICTの活用は、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や子供たちの主体的・協働的な学びを実現する上で効果的」、「特別な支援

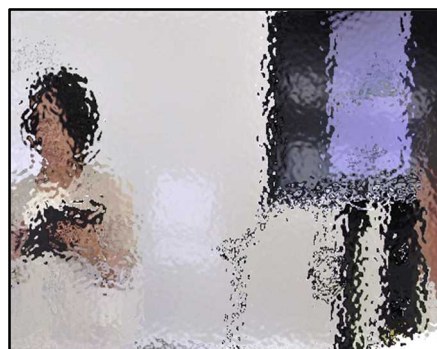


写真3 ICT機器を活用した授業場面

が必要な子供たちに対して、障害の状態や特性等に応じて活用することは、各教科の指導においても極めて有効」であると記されている。実際のやり取りの動画などを見せることで、視覚的にコミュニケーションを図る上で大切なことなどを比較することなどができ、高等特別支援学校版CAN-DOリストの特徴の一つである「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点を取り入れた指導目標の達成に効果的である。また、ICT機器を活用することで、生徒の興味・関心を高め、そのことが、主体性や学習意欲の向上につながり、学ぶ意欲が高まり、コミュニケーション能力を育成することができる。さらに、授業全体の流れの中で、

*3) 文部科学省 『平成26年度 文部科学白書』 平成27年

今どの活動をしているのかななどの情報を、活動が変わる都度提示すれば、活動への切り換えが苦手な生徒や全体の見通しが分からないと不安を感じる生徒への対応となる。

5 高等特別支援学校版CAN-DOリストを活用した検証授業の実際

(1) 検証授業の概要

本校の第2学年（4学級 計31人）に、7月に検証授業Ⅰ（「ファーストフード店で注文をしよう。」）を、11月に検証授業Ⅱ（「道案内をしよう。」）を実施した。

(2) 生徒の実態

本校生徒は、1年次から、週1時間、外国語を学習してきている。これまで、言語活動を多く取り入れ、簡単な英語を使っての挨拶など、初歩的な会話ができるようになってきている。例えば、「How are you?」などの問い掛けに対して、「I'm fine, thank you.」だけではなく、自分のそのときの状態に応じて、「I'm sleepy.」や「I'm hungry.」などの表現も用いて、質問に答えようとする姿が見られる。英語で友達や教師とコミュニケーションを図りたいという気持ちを多くの生徒がもっているが、学習した英語を使って、自らコミュニケーションを図ろうとしたり、何とかコミュニケーションを継続させようとする姿はあまり見られない。学習した英語表現が定着していないことに加え、方略的能力の未熟さや成功体験の少なさが原因にあると考えられる。

(3) 検証授業Ⅰの実際

ア 検証授業Ⅰのねらい

検証授業Ⅰでは、開発した教える側のCAN-DOリスト（表4、表5）を反映させることにより、「この時間に教師が何を教えるか」を明確にした授業構想をもって実践した（図15）。

開発した高等特別支援学校版CAN-DOリストを効果的に活用するための授業づくりの工夫を視点として、

生徒の学習意欲やコミュニケーション能力がどのように高まったのかを検証した。それぞれの工夫内容について、具体的に以下に示す。

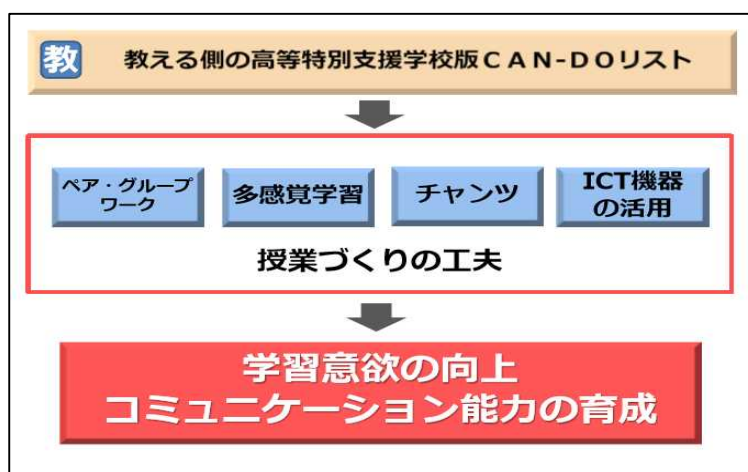


図15 検証授業Ⅰにおける授業構想図

視点1 ペア・グループ ワーク	基本的に常にペア・グループワークで活動を設定した。そうすることにより、コミュニケーション活動の必然性が生じ、方略的能力を駆使させるようにした。活動によっては、実態に応じて組み合わせることも気を付けた。
視点2 多感覚学習	ウォームアップの際、アイマスクの使用により、聴覚に集中させたり、上下左右の認識が容易なピクチャーカードを提示したりした。語彙や表現の定着促進のために学習意欲の喚起をねらいとした。
視点3 チャンツ	チャンツのリズムで動きをとりながら、ファーストフード店での簡単なやり取りに用いる語彙や表現を覚えやすいようにした。
視点4 ICT機器の活用	二場面のファーストフード店での会話を、事前にタブレット端末で撮影し、そのモデルを見せることで、生徒が自らコミュニケーションを図る上で大切なポイントを考え、模倣できるようにした。

イ 単元名：「ファーストフード店で注文をしよう。」

ウ 単元目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
飲食店で注文や依頼をするときに、意欲的に進んでコミュニケーションを図ろうとしている。	飲食店での注文や依頼の表現を適切に使うことができる。	飲食店での注文や依頼の表現を聞いて、内容を正しく理解することができる。	飲食店での会話に必要な単語の意味を理解している。 欧米におけるレストランでは、接客を受けたときにチップを渡す習慣があることを知る。
教える側のCAN-DOリスト（表4と表5）との関連			
コミュニケーション 「1 アイコンタクト」 「2 スマイル」 「6 聞き返し」 「8 ジェスチャー」	やりとり I-1 自分の欲しい物を伝えたり、尋ねたりすることができるようにする。	聞くこと V-2 買い物の場面での質問や会話を聞いて分かるようにする。	



エ 指導計画

主な学習活動・内容	時数
1 食べ物を表す単語を学習する。 (1) ピクチャーカードを見ながら、食べ物を表す単語を発音する。 (2) 英語を聞いて、食べ物を表す単語を聞き取る。	1
2 アイスクリーム屋さんでの会話を学習する。 (1) アイスクリーム屋さんでの注文・依頼の仕方のモデルを見たり、聞いたりしながら練習する。 (2) 友達と注文のやり取りをする。	1
3 ファーストフード店での会話を学習する。 (1) ファーストフード店でのやり取りのモデルを見る。 (2) ファーストフード店でのやり取りの英文を理解する。 (3) 友達と会話のやり取りをする。	1 本時

オ 指導に当たって

本単元は、生徒が日常生活でも行くことのあるアイスクリーム屋やファーストフード店などの飲食店で、簡単な英語を使って、友達や教師とやり取りをし、コミュニケーションを図ろうとする態度を養うことをねらいとした。生徒にとっては、日常生活でなじみのある場面であり、言語活動において使用する語彙や英語表現、方略的能力などを想起しやすく、言語活動にも取り組みやすいと考えた。具体的なスキット活動を通して、言語の使用場面や働きを意識して、アイコンタクトやジェスチャーなど取り入れた会話練習をすることにより、友達や教師とコミュニケーションを図る楽しさを味わうことができるようにした。また、実態調査から分かるように、「英語の授業で楽しいと思うことは何ですか。」という問いに対して、「英語のゲーム」と答えた生徒が多くいることから、学習に興味・関心をもたせるために、導入においてゲームを取り入れるなどの工夫をした。

カ 実際

過程	主な学習活動	具体的な手立て 授業の視点	生徒の反応
導入	<p>1 挨拶をする。</p> <p>2 ウォームアップをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ ペアになって福笑いをする。 ・ アイマスクをした方が絵を描く。 ・ right, left が分からない場合は、黒板に貼ってあるピクチャーカードを見て伝える。 </div> <p>3 本時の学習内容と学習目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>自分の欲しい物を伝えたり相手に欲しい物を聞いたりすることができる。</p> </div>	<p>○ 教師の笑顔や声のトーンに気を付け、楽しく英語を使う雰囲気をつくる。</p> <p>○ 見通しがもてるように、授業の流れを示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>授業の流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ウォームアップ(お楽しみ) ・ ビデオを見てみよう ・ 練習しよう。 ・ 実演しよう。 </div> <p>○ 左右が混同している生徒には、ピクチャーカードを提示することで、ペアワークの際、間違いを心配せずに、安心して発音できるようにする。</p> <div style="text-align: center;">  </div>	<p>ファーストフード店で注文できるかな。難しそうだな。</p> <p>実際にファーストフード店の実演をするんだ。</p> <p>“福笑いゲーム”。楽しそう。</p> <p>right? left? どっちだったかな。ピクチャーカードを見ればいいんだ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ピクチャーカードがあって分かりやすい!</p> <p>Pardon?</p> <p>Up, up! left!</p> </div>
	展開	<p>4 ファーストフード店での会話のモデルを確認する。</p> <p>5 コミュニケーションを図る上で大切なポイントを考える。</p> <p>6 チャンツを用いてやり取りの練習をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>A: Hello. What would you like? B: One hamburger and coffee, please. A: Which size would you like? B: Medium, please. B: How much? A: ~yen, please. B: Here you are. A: Thank you very much. Here you are. B: Thank you.</p> </div> <p>7 適切なコミュニケーションを図りながら、練習する。</p> <p>8 実演をする。</p>	<p>○ 二場面のモデルをタブレット端末で提示することで、コミュニケーションを図る上で大切なポイントを理解させる。</p> <div style="text-align: center;">  <p>好ましいモデル</p> <p>好ましくないモデル</p> </div> <p>○ チャンツを用いることにより、ファーストフード店におけるやり取りに必要な語彙や表現を覚えさせ、ペアワークで互いにやり取りをさせる。</p>
終末		<p>9 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 高等特別支援学校版CAN-DOリストを反映したワークシートを用いることで、生徒が自己評価ができるようにする。</p>

キ 検証授業Ⅰの成果と課題

授業づくりの視点に基づいた成果と課題は以下のとおりである。

授業づくりの視点	成果	課題
視点1 ペア・グループ ワーク	<ul style="list-style-type: none"> 友達と関わりながら活動することで、相手に英語を伝えようとする意識をもつことができ、アイコンタクトやうなずきなどの重要性に気付くことができた。 コミュニケーションを図る上で大切なポイントを友達と話すことで、考えるヒントになっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 方略的能力が、アイコンタクトやうなずきのみとなった。多様な方略的能力を育成できる工夫が必要である。 学習意欲をより高められるようなペア・グループワークを工夫する必要がある。
視点2 多感覚学習	<ul style="list-style-type: none"> アイマスクを着けることで、聴覚を集中することができ、語彙や表現の習得に効果的であった。 ピクチャーカードを示すことで、左右混同している生徒でも安心して英語を発話することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動ができるまでに、時間が掛かってしまった。活動について、説明を分かりやすくしたり、視覚的に理解させたりする必要があった。
視点3 チャンツ	<ul style="list-style-type: none"> 体を動かしながらリズムに乗ってやり取りに必要な表現を発話することによって、容易にその表現を習得することができた。 楽しみながらコミュニケーション活動を行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習意欲を向上させるために、リズムや音程を変えるなどの工夫が必要である。
視点4 ICT機器の活用	<ul style="list-style-type: none"> 見通しをタブレット端末で示すことで、今どきのようなことをするのかなど、活動の切り替えがスムーズにいき、安心して学習に取り組むことができた。 二場面のやり取りのモデル会話を動画で見せることで、コミュニケーションを図る上で大切なポイントを生徒自身が考え、アイコンタクトや笑顔に気を付けながらコミュニケーションを図ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を効果的に活用するために、モデルの提示の仕方や、提示する前の説明の仕方を分かりやすくする必要がある。 生徒が学習に対して、興味・関心をもつICT機器の活用方法の研修を深める必要がある。

検証授業Ⅰにおいて、授業では、教える側の高等特別支援学校版CAN-DOリストの項目を意識した言葉掛けを行うことで、目標を常に意識した展開が可能になった。また、授業づくりの4視点を取り入れることで、生徒がアイコンタクトやうなずきなどの方略的能力を用いようとする姿が多く見られるようになった。しかし、全員にそのような姿は見られず、個人差が大きく表れた。その原因は、CAN-DOリストの活用が教師のみであったため、生徒は、コミュニケーション活動に対する見通しをもちにくかったことが考えられる。また、自分が何をどの程度できるようになったか振り返ることが十分できなかったため、達成感を味わわせる授業には至らなかった。

(4) 検証授業Ⅱの実際

ア 検証授業Ⅱのねらい

検証授業Ⅰの課題を踏まえ、検証授業Ⅱでは、学ぶ側のCAN-DOリストを教師と生徒が共有し、活用することとした。具体的には、図16のような授業構想をもって授業に臨んだ。検証授業Ⅰにおける視点に

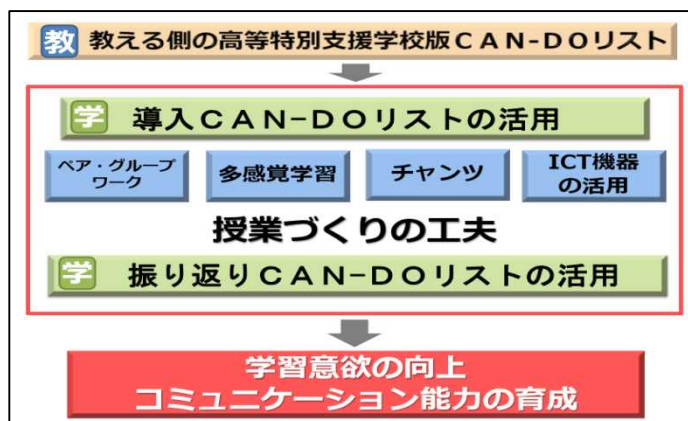


図16 検証授業Ⅱにおける授業構想図

加え、「導入CAN-DOリストの活用」と「振り返りCAN-DOリストの活用」を新たな視点として、生徒の学ぶ意欲を高め、コミュニケーション能力を育むことができたかを検証した。

視点ア 導入CAN-DOリストの活用	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が使える導入CAN-DOリストを示すことで、生徒が学習に対して見通しや期待感、意欲をもつことができるようにした。 生徒が、どのような方略的能力を用いればよいかを理解しやすいようにした。
視点1 ペア・グループ ワーク	<ul style="list-style-type: none"> CAN-DOリストの到達目標を達成するために、友達や教師とのやり取りを通して、多様な方略的能力を用いる場面を設定した。
視点2 多感覚学習	<ul style="list-style-type: none"> 動きを伴った活動を取り入れたり、アイマスクを着けて聴覚に集中させたりすることを意識することで、語彙や表現の定着を図った。
視点3 チャンツ	<ul style="list-style-type: none"> 検証授業Ⅰ同様に、チャンツで英語表現の定着を促した。その際、5音節程度に短くし、andやatなどの接続詞や前置詞は、表現全体を覚えやすいようにするために、入れないことにした。 アプリ機能を使用することで、リズムに変化をもたらすなどし、興味・関心をもたせ、学習意欲を高めるようにした。
視点4 ICT機器の活用	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の学習意欲やコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるために、幾つかのアプリ機能を使用することで、生徒に興味・関心をもたせ、楽しみながら積極的に学習活動に取り組めるようにした。
視点イ 振り返りCAN-DOリストの活用	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が使える振り返りCAN-DOリストをチェックすることで、達成感を味わわせるようにした。

イ 単元名：「道案内をしよう。」

ウ 単元目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
道案内をする際に、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	簡単な道案内をしたり、道を尋ねたりすることができる。	簡単な道案内を聞いて理解することができる。	英語と外来語では表現やアクセントが違うことに気付く。
教える側のCAN-DOリスト（表4、表5）との関連			
コミュニケーション 「1 アイコンタクト」 「2 スマイル」 「3 クリアボイス」 「4 繰り返し」 「6 聞き返し」	やりとり Ⅲ-4 場所を尋ねたり、道案内をしたりすることができるようにする。	聞くこと V-4 やさしい道案内を聞いて分かるようにする。	





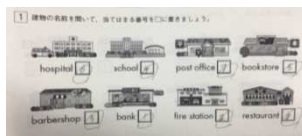

エ 指導計画




主な学習活動・内容		時数
1 建物の名前を知る。	[検証授業Ⅱ-1]	1
2 道案内の英語表現に慣れ、道案内の語句を聞いて理解する。	[検証授業Ⅱ-2]	1
3 簡単な道案内の表現を聞いて、理解する。	[検証授業Ⅱ-3]	1
4 簡単な道案内をする。	[検証授業Ⅱ-4]	1

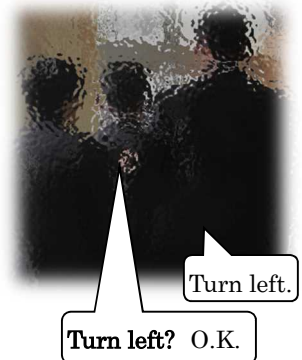



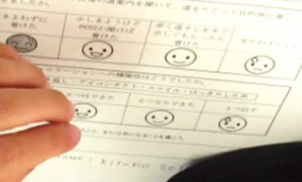
オ 指導に当たって

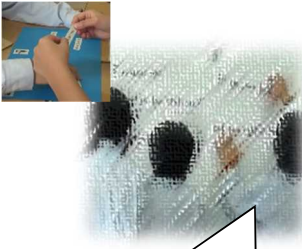
道案内という言語活動は、生徒にとって実生活に結び付いた内容で、活動内容が容易にイメージしやすく意欲的に取り組むことができる活動である。また、実際に案内するという具体的な活動によって、学習した英語表現が記憶に残りやすいのではないかと考えた。さらに、自分が話した単語や英語表現がうまく伝わらないときに、コミュニケーションを継続させようとする方略的能力を使用する場面も取り入れながら、道案内をすることができると思った。

カ 実際 (検証授業Ⅱ-1)

過程	主な学習活動	具体的な手立て 授業の視点	生徒の反応																																												
導入	<p>1 挨拶をする。</p> <p>2 ウォームアップをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2グループに分かれる。 ・ 伝言を伝える順番を決める。 ・ 他のチームに聞かれないように伝言を最後まで、伝える。 ・ より早く、より正確に伝えたグループの勝ち。 </div> <p>3 本時の学習内容と学習目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>建物の名前を覚えよう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 笑顔や声のトーンに気を付け、楽しい雰囲気をつくる。 ○ 見通しがもてるように、授業の流れを示す。 ○ ウィスパークゲームをすることで、方略的能力を使う場面を設定する。 ○ 聞き取れないときの尋ね方を考えさせる。 視点1 ○ 導入CAN-DOリストを用い、見通しや期待感をもたせる。 視点ア <div data-bbox="655 748 1066 1037" style="border: 1px solid gray; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">道案内をしよう</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th></th> <th>このレッスンのCAN-DOリスト</th> <th>とても自信がある</th> <th>自信がある</th> <th>あまり自信がない</th> <th>自信がない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>話す</td> <td>道案内ができる。</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">聞く</td> <td>やさしい道案内を聞いて分かる。</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> <tr> <td>各建物の名前を聞いて分かる。</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> <tr> <td rowspan="4">コミュニケーション</td> <td>☆アイコンタクト</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> <tr> <td>☆スマイル</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> <tr> <td>☆クリアボイス</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> <tr> <td>聞き返し</td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> <td><input type="checkbox"/></td> </tr> </tbody> </table> <p style="font-size: small;">☆今日のCAN-DO</p> </div>		このレッスンのCAN-DOリスト	とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	自信がない	話す	道案内ができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	聞く	やさしい道案内を聞いて分かる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	各建物の名前を聞いて分かる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	コミュニケーション	☆アイコンタクト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	☆スマイル	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	☆クリアボイス	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	聞き返し	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<div style="text-align: center;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>One more time!</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>“Pardon”や“One more time”を使えばいいんだ。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>自信がある！にチェックしよう。よし頑張るぞ。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>道案内できるかな。難しそうだな。</p> </div>
		このレッスンのCAN-DOリスト	とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	自信がない																																									
話す	道案内ができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
聞く	やさしい道案内を聞いて分かる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
	各建物の名前を聞いて分かる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
コミュニケーション	☆アイコンタクト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
	☆スマイル	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
	☆クリアボイス	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
	聞き返し	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>																																										
展開	<p>4 建物の名前に慣れる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>station, bank, flower shop, hospital, school, supermarket, department store, etc.</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2グループに分かれる。 ・ 両サイドから建物の名前を言いながら進む。 ・ 反対サイドからの友達と出会ったら、じゃんけんをする。 ・ 負けたらもう一度元に戻り、勝ったら進む。 ・ 先に相手の陣地に進んだ人が勝ち。 </div> <p>5 リスニングクイズをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ タブレット端末でピクチャーカードを示すことで理解を促す。 視点4 ○ 慣れ親しんでいない単語や読めない単語は、生徒用タブレット端末で調べさせる。 視点4 ○ チャンツでリポートさせる。 視点3 ○ ゲームの説明は、教師も体を使いながら、分かりやすい英語で説明する。 視点1 視点2 <div data-bbox="901 1153 1021 1288" style="border: 1px solid gray; padding: 5px; margin: 5px;">  <p style="text-align: center;">視点4</p> </div>	<div style="text-align: center;">  <p>(タブレット端末で意味を調べている様子)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>station, bank, hospital, rock scissors paper...</p> </div> <div style="text-align: center;">  </div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>1] 建物の名前を聞いて、図ではある建物を3つ選んでみましょう。</p>  </div>																																												
	終末	<p>6 本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 動から静の雰囲気に変える。 ○ 教師の答えを聞く前に、友達と答え合わせをさせる。 視点1 ○ 振り返りCAN-DOリストで本時の目標を振り返らせ、達成感を味わわせる。 視点イ ○ 次時の学習内容を伝え、生徒が期待感をもてるようにする。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px;"> <p>ゲームで何回も言ったので、聞き取ることができました。</p> </div> <div style="text-align: center;">  </div>																																											

過程	主な学習活動	具体的な手立て 授業の視点	生徒の反応
導入	<p>1 挨拶をする。</p> <p>2 ウォームアップをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ ピクチャーカードを見ながら、前時に学習した建物の名前を確認する。 ・ ホワイトボードに前時に学習した、建物のピクチャーカードを3～4枚並べる。 ・ 目をつぶり、教師がカードを1枚抜く。 ・ どのカードがなくなったかを当てる。 ・ 2回程繰り返し、ルールが分かったら、生徒が先生役をする。 ・ 1回終わる毎に発音リピートする。 </div> <p>3 本時の学習内容と学習目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>道案内の表現に慣れよう。</p> </div>	<p>○ 笑顔や声のトーンに気を付け、楽しい雰囲気をつくる。</p> <p>○ 動作を伴った指示で生徒に分かりやすく示す。</p> <p>○ タブレット端末のアプリ（抽選器）で先生役を決める。</p> <p>○ 早押しアンサーで生徒の意欲を引き出す。</p> <p>○ 生徒を先生役にさせる。</p> <p>○ 導入CAN-DOリストを用い、見通しや期待感をもたせる。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点4</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点2</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点1</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点ア</div> </div>	<div style="text-align: right;">  <p>Kanako</p> </div> <p>(タブレット端末で抽選器を回す生徒の様子)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>理容店の意味も発音もタブレットで前の授業で調べたので、覚えてますよ。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>“Repeat after me, Barbershop.”</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>ちょっと自信ないな。でも自信ありになるように頑張ろう。</p> </div>
	展開	<p>4 道案内の表現に慣れ親しむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>Go straight. Turn right. Turn left. on your right on your left next to ~</p> </div> <p>5 リスニングクイズをする。</p>	<p>○ ピクチャーカードで方向を表す語句を提示する。</p> <p>○ タブレット端末のアプリ（メトロノーム）で興味・関心をもたせ、意欲的に学習に取り組ませるようにする。</p> <p>○ 1回目はナチュラルスピードで、2回目はゆっくり手で動きを示して分かりやすくする。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点4</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点3</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点2</div> </div>
終末		<p>6 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 振り返りCAN-DOリストで本時の目標を振り返らせ、達成感を味わわせる。</p> <p>○ 次時の学習内容を伝え、生徒が期待感をもてるようにする。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 5px;">視点イ</div> </div>

過程	主な学習活動	具体的な手立て 授業の視点	生徒の反応																																													
導入	<p>1 挨拶をする。</p> <p>2 ウォームアップをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> 方向を表す指示 Go straight, Turn right, Turn left を聞いて、その場で体を動かす。 3人グループになる。 一人がアイマスクを付け、もう一人が方向指示する。もう一人はアイマスクの友達を見守ったり、指示を出す友達と助け合う。 教室内を動いてみる。 </div> <p>3 本時の学習内容と学習目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>簡単な道案内を聞き取ろう。</p> </div>	<p>○ 笑顔や声のトーンに気を付け、楽しい雰囲気をつくる。</p> <p>○ 動作を伴った指示で生徒に分かりやすく英語で説明する。</p> <p>○ 実際に体を動かして定着を促す。アイマスクをして、ゲーム的な要素を取り入れ、楽しみながら定着を促す。また、アイマスクをすることにより、聴覚を集中させる。</p> <p style="text-align: right;">視点1 視点2</p> <p>○ 導入CAN-DOリストを用い、見通しや期待感をもたせる。 視点ア</p> <table border="1" data-bbox="662 840 1069 1131"> <thead> <tr> <th></th> <th>このレッスンのCAN-DOリスト</th> <th>とても自信がある</th> <th>自信がある</th> <th>あまり自信がない</th> <th>自信がない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>話す</td> <td>道案内ができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">聞く</td> <td>やさしい道案内を聞いて分かる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>建物の名前を聞いて分かる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="3">コミュニケーション</td> <td>アイコンタクトをとることができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>笑顔でやり取りできる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>はっきりした声で話すことができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>聞き取れないときに聞き返すことができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		このレッスンのCAN-DOリスト	とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	自信がない	話す	道案内ができる。					聞く	やさしい道案内を聞いて分かる。					建物の名前を聞いて分かる。					コミュニケーション	アイコンタクトをとることができる。					笑顔でやり取りできる。					はっきりした声で話すことができる。						聞き取れないときに聞き返すことができる。					 <p>Turn left? Turn left. O.K.</p> <p>(アイマスクを着け、方向を表す表現を聞いて教室内を動く生徒の様子)</p> <p>今日は自信ありをチェックしよう。楽しみだ。</p> <p>友達と会話するときは、アイコンタクトを忘れずにしよう。</p>
	このレッスンのCAN-DOリスト	とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	自信がない																																											
話す	道案内ができる。																																															
聞く	やさしい道案内を聞いて分かる。																																															
	建物の名前を聞いて分かる。																																															
コミュニケーション	アイコンタクトをとることができる。																																															
	笑顔でやり取りできる。																																															
	はっきりした声で話すことができる。																																															
	聞き取れないときに聞き返すことができる。																																															
展開	<p>4 道案内の表現に慣れる。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ペアになる。 ホワイトボードに拡大した地図を貼り、棒人形を用いて道案内の練習をする。 </div> <p>5 リスニングクイズをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ペアになる。 二人で協力しながら、リスニングをする。 </div>	 <p style="text-align: right;">視点4</p> <p>○ 棒人形を使い、チャンツに合わせて楽しく練習させる。</p> <p>○ 棒人形を使うことで、左右を確認できるようにする。 視点3</p> <p>○ 練習で使用した地図を使ってリスニングをする。1回目は口頭のみで、2回目は手で動きを示す。 視点1</p>	 <p>S1: Turn right at the first corner. It's on your left. S2: S1, eye contact!</p> 																																													
終末	<p>6 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 振り返りCAN-DOリストで本時の目標を振り返らせ、達成感を味わわせる。 視点イ</p> <p>○ 次時の学習内容を伝え、生徒が期待感をもてるようにする。</p>	 <p>手で示してもらえばどり着きました。次が最後か。道案内できるように頑張ろう。</p>																																													

過程	主な学習活動	具体的な手立て 授業の視点	生徒の反応																																				
導入	<p>1 挨拶をする。</p> <p>2 ウォームアップをする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ペアになる。 封筒に入ったバラバラの道案内の文章を受け取る。 ペアで文章を並べ替え、他のペアと早さを競う。 答えを生徒同士で確認する。 チャンツで道案内の表現を確認する。 </div> <p>3 本時の学習内容と学習目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 相手が行きたい場所を教えてあげよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 笑顔や声のトーンに気を付け、楽しい雰囲気をつくる。 生徒が分かるように、動作を交えながら、活動の説明する。 ペアやグループワークを通して、前時の学習を想起させる。 視点1 チームで競争させ、楽しみながら活動に取り組ませる。 視点1 視点2 チャンツで道案内に関する語彙や表現を再確認させる。 視点3 導入CAN-DOリストを用い、見通しや、期待感をもたせる。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>このレッスンのCAN-DOリスト</th> <th>できる 自信がある</th> <th>できる 自信がある</th> <th>できる 自信がある</th> <th>できる 自信がない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>話す</td> <td>道案内ができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>聞く</td> <td>市街しい道案内を聞いて分かる。 建物の名前を聞いて分かる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>読む</td> <td>アイコンタクトをとることができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>書く</td> <td>地図で方向取りができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>表現</td> <td>はっきりした声で話すことができる。 顔を動かさないままに顔を返すことができる。</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		このレッスンのCAN-DOリスト	できる 自信がある	できる 自信がある	できる 自信がある	できる 自信がない	話す	道案内ができる。					聞く	市街しい道案内を聞いて分かる。 建物の名前を聞いて分かる。					読む	アイコンタクトをとることができる。					書く	地図で方向取りができる。					表現	はっきりした声で話すことができる。 顔を動かさないままに顔を返すことができる。					 <p>“You are welcome”は最後だよだね。</p> <p>最高速のテンポでチャレンジしたいです。</p> <p>T: Excuse me, where is the station? S: Go straight and turn left, then turn right at the next corner. It's on your right. T: Thank you. S: You are welcome.</p> <p>今日は道案内の最後のレッスンだ。自信ありになるぞ。</p>
		このレッスンのCAN-DOリスト	できる 自信がある	できる 自信がある	できる 自信がある	できる 自信がない																																	
話す	道案内ができる。																																						
聞く	市街しい道案内を聞いて分かる。 建物の名前を聞いて分かる。																																						
読む	アイコンタクトをとることができる。																																						
書く	地図で方向取りができる。																																						
表現	はっきりした声で話すことができる。 顔を動かさないままに顔を返すことができる。																																						
展開	<p>4 教室内で道案内をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> グループになる。 ホワイトボードに拡大した地図を貼り、人形を用いて道案内の練習をする。 </div> <p>5 教室を町に見立てて、実際に道案内をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ルーレットで行先を決定する。 グループ内で役割を決める。 チャンツで覚えた表現で道案内をする。 コミュニケーションを図る上でのポイントを確認する。 行き着いた場所に、記載されている点数を多く獲得したグループの勝ち。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末のアプリ（抽選器）を利用して、グループを分けることで、活動に積極的に取り組めるようにする。 視点4 道案内ができるように、人形を用いて、方向を確認しながら練習させる。 視点1 視点2 タブレット端末のアプリ（ルーレット）を使い、道案内する場所を決めることで、生徒の興味を引き出し、活動に積極的に取り組めるようにする。 視点4 導入CAN-DOリストを見せながらコミュニケーションの大切なポイントを確認させる。 視点ア 	 <p>(地図上で人形を動かす生徒の様子)</p> <p>“Turn right.” 人形が駅の方を向いているから、right はこっちだよ。</p>  <p>S1: Excuse me, where is the bank? S2: Pardon? S1: Where is the bank? S2: Oh, bank. OK. Go straight and turn right, and turn left at the next corner. It's on your left. ...</p>																																				
	終末	<p>6 まとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りCAN-DOリストで本時の目標を振り返らせ、達成感を味わわせる。 視点イ 生徒にできるようになったことや感想を聞く。 生徒ができるようになったことを称賛して終わる。 	<p>コミュニケーションをするときは、アイコンタクトやジェスチャーを使って、分かりやすいように相手に伝えるんだっ!</p> <p>今だったら、外国人に道を尋ねられたら、道案内できそうです。</p> <p>できるようになったことや、気を付けたこと、これからの目標を書きましょう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 1人1人道案内ができるようになった。 </div>																																			

キ 検証授業Ⅱのまとめ

検証授業Ⅰを経て、開発したCAN-DOリストを効果的に活用し、生徒の学習意欲を高め、コミュニケーション能力を育むために、以下の視点をもって授業に臨んだ。視点をもつことで、生徒に興味・関心をもたせることができ、1単位時間、集中して主体的に学習に取り組む姿が見られ、自発的な質問も出るようになった。また、生徒が英語を発している時間が増え、何よりも楽しそうに活動する姿を見ることができた。各視点のまとめを以下に述べる。

授業づくりの視点	成果と今後に向けて
<p style="text-align: center;">視点ア 導入CAN-DO リストの活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒に分かりやすい導入CAN-DOリストを継続して提示したことで、これから何を学ぶのか単元全体の見通しや期待感をもたせることができた。 ○ どのような方略的能力を用いればよいのか、確認させることができた。 ● 今後も単元を通して継続的にCAN-DOリストを使用しながら、更に活用できるリストにするために修正・改善を行っていく必要がある。
<p style="text-align: center;">視点1 ペア・グループ ワーク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 友達とのやり取りをする中で、相手に英語を伝えようとする意識をもつことができ、場面に合った方略的能力の育成につながった。 ○ 友達と教え合ったり、確認したり、互いに協力しながらコミュニケーションを図ろうとすることができた。 ● 友達とのやり取りから、語、句、文の規則などに気付けるような活動やそのための発問の工夫を考えていく必要がある。
<p style="text-align: center;">視点2 多感覚学習</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アイマスクを着けることで、聴覚を集中させることができ、語彙や表現の定着を図ることができた。 ○ ピクチャーカードを示すことで、左右混同している生徒が安心して英語を発話でき、学習意欲が高まり、コミュニケーションを積極的に図ろうとすることができた。 ○ 人形を地図上で使用することで、左右を確認しながら、道案内をすることができ、1単位時間の中で語彙の習得を促すことができた。 ○ 動きを伴いながら発音や発話をすることで、より語彙や表現の定着を促すことができた。 ● 今後も様々な感覚を使った学習の工夫を進めていきたい。
<p style="text-align: center;">視点3 チャンツ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ タブレット端末のアプリ（メトロノーム）を活用したことで、テンポを変えたり、音の種類を変更したりすることができ、生徒が、楽しみながら歌の歌詞のように、道案内に関する語彙や表現を覚えることができた。 ○ “and”や“at”のような接続詞や前置詞を外すことで、表現を簡単に覚えやすくし、定着を促すことができた。 ● 日常生活に馴染みのある言語の使用場面を設定し、そこでの英語表現で生徒の記憶に残るチャンツの仕方を工夫し続けたい。
<p style="text-align: center;">視点4 ICT機器の活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文字を含めた視覚情報をICT機器で提示することにより、時間を掛けずに、理解を促すことができた。 ○ 様々なアプリ機能を活動の随所に取り入れることにより、生徒の学習意欲を高め、集中して主体的に取り組ませることができた。 ● 授業に応じて、様々なアプリを活用しながら、生徒の意欲を高めていくことが必要である。 ● 生徒用のタブレットの効果的な活用方法を見いだす必要がある。
<p style="text-align: center;">視点イ 振り返り CAN-DO リストの活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 具体的な文言やイラストを示したことで、生徒が英語を使って、何ができるようになるかが明確になり、達成感を味わわせることができた。 ○ 学習に対する振り返りをさせることにより、次時への学習意欲を高めることができた。 ● 1年から3年までの全学年についての振り返りCAN-DOリストを作成し、生徒と共有することが必要である。

6 検証授業後の生徒の変容と考察

検証授業Ⅱの後に、アンケートを実施した。結果を以下に示す。

(1) 結果

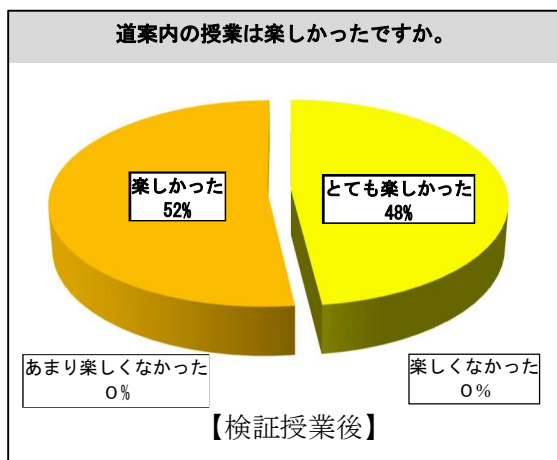


図17 授業の興味・関心

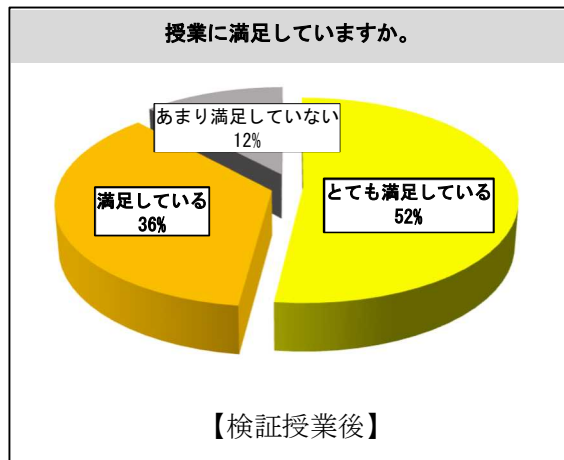


図18 授業の満足度

検証授業Ⅱ後は、全員が道案内の授業に対してとても楽しかった、または、楽しかったという回答をしており、授業の満足度も高い結果となっている。

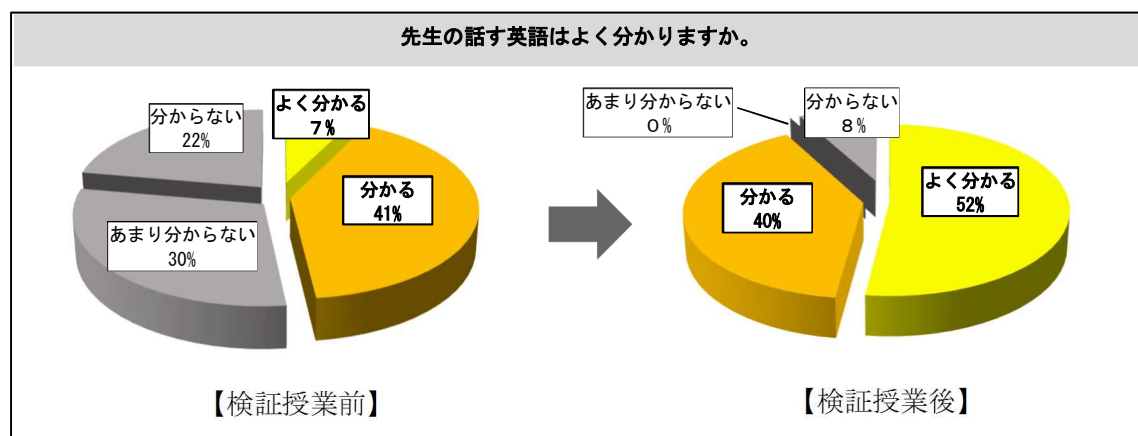


図19 教師の話す英語の理解

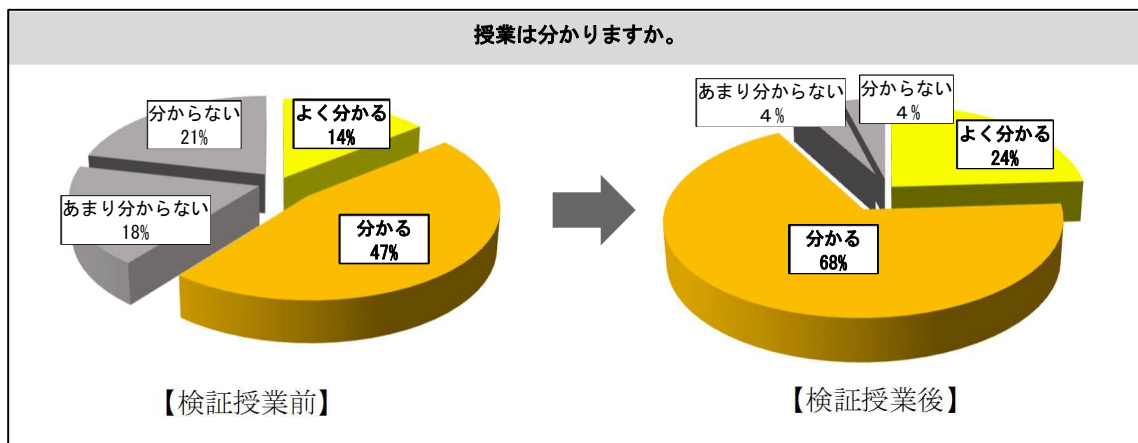


図20 英語の授業の理解

検証授業前の実態調査では、教師の話す英語が分からないという生徒が半数以上いたが、検証授業Ⅱ後は、92%の生徒が教師の話す英語を分かり、授業も理解できたと回答した。

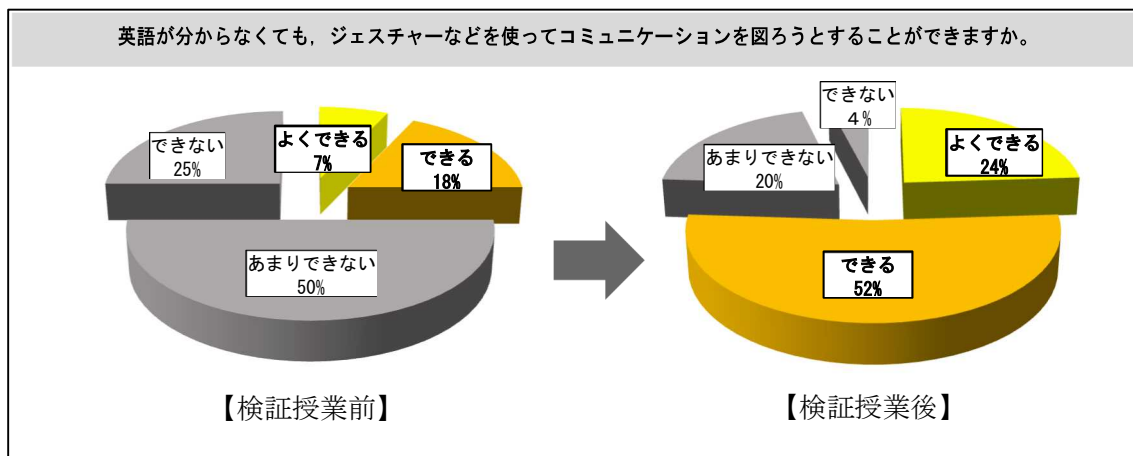


図21 コミュニケーションへの積極性

コミュニケーションへの積極性に関する質問は、6月の実態調査ではジェスチャーなどを交えながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとできると回答している生徒は25%だったが、検証授業Ⅱ後は、76%の生徒が、道案内なら、コミュニケーションをどうにかして図ろうとできると回答しており、CAN-DOリストを活用した授業実践後は大幅に数値が上昇している。

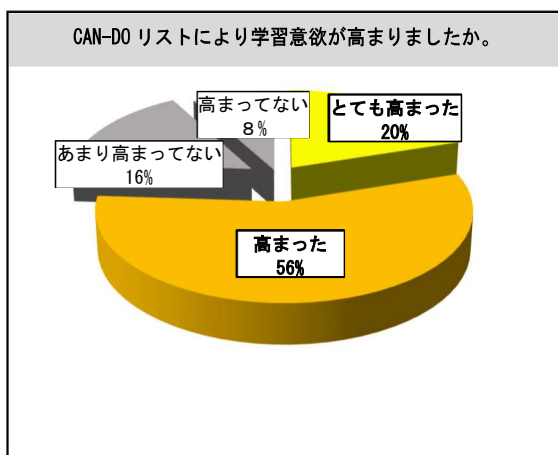


図22 リスト活用による学習意欲の高まり

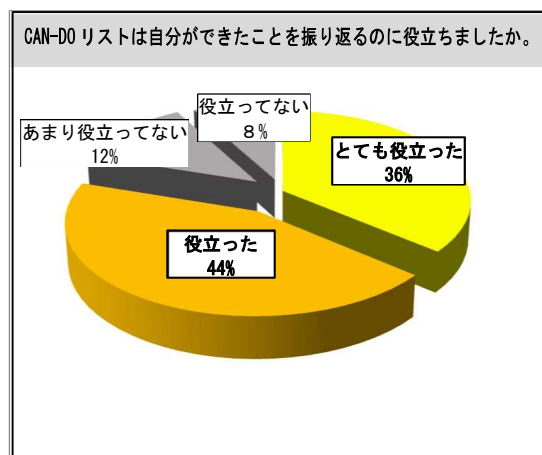


図23 リストの有用性

授業導入時でイラスト入りのCAN-DOリストを示したことで、学習意欲が「とても高まった」、「高まった」と76%の生徒が肯定的な回答をした。

また、4段階に分かれたイラスト入りの振り返りCAN-DOリストを毎時間提示したことで、80%の生徒が、自分ができたことを振り返るのに「とても役に立った」、「役に立った」と回答した。

(2) 考察

導入CAN-DOリストの活用により、見通しや期待感をもたせることができ、生徒自身に、主体的に学習に取り組もうという意欲が芽生えたと考える。また、学習意欲を持続させるために、授業づくりの視点を基に様々な手立てを工夫したことで、授業に対する理解が深まったと考える。さらに、振り返りCAN-DOリストの活用により、「学習した英語を使って、～することができた。」という達成感を味わわせることができた。このような手立てによって、ジェスチャーなどの方略的能力の重要性に気付かせ、方略的能力を使いながらコミュニケーションを図ることへの自信をもたせることができた。

IV 研究のまとめ

本研究は、知的障害のある生徒の外国語科の授業において、生徒の学習上の特性に応じた、高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発し、リストを活用するための授業づくりを工夫するなど、指導の在り方について研究を進めてきた。本研究の成果と課題については、以下のとおりである。

1 研究の成果

- (1) 実態調査を実施・分析するとともに、コミュニケーション能力の発達の段階と構成要素との関連について整理し、生徒に特に必要なコミュニケーション能力が、方略的能力であることを明らかにすることができた。
- (2) 知的障害のある生徒の学習上の特性に応じた高等特別支援学校版CAN-DOリストを開発することができた。
- (3) 開発した高等特別支援学校版CAN-DOリストを効果的に活用するための授業づくりの視点をもって授業を実践したことで、生徒の学習意欲を高め、方略的能力を用いながら、コミュニケーションを図ろうとする姿を見ることができた。

2 今後の課題

- (1) 生徒が、入学時に英語を用いて何ができるのかを正確に捉えるとともに、何ができるようになりたいのかを把握し、学習時期や学習内容を検討し、実態に応じたCAN-DOリストを、今後も継続的に修正・改善していく必要がある。
- (2) 生徒のコミュニケーション能力の評価については、1単位時間の授業の中だけではなく、学期や年間を通した長期的な視点で捉える必要がある。

【引用文献】

- | | | | | |
|-----|-------|-------------------------------|-------|-------|
| ※1) | 文部科学省 | 『特別支援学校学習指導要領解説
総則等編（高等部）』 | 平成21年 | 海文堂書店 |
| ※2) | 村野井 仁 | 『第二言語習得から見た効果的な
英語学習法・指導法』 | 2006年 | 大修館書店 |
| ※3) | 文部科学省 | 『平成26年度文部科学白書』 | 平成27年 | 文部科学省 |

【参考文献】

- | | | | | |
|---|--------------------|---|-------|-----------------|
| ○ | 文部科学省 | 『特別支援学校学習指導要領解説
総則等編（高等部）』 | 平成21年 | 海文堂書店 |
| ○ | 文部科学省 | 『高等学校学習指導要領解説
外国語編・英語編』 | 平成22年 | 開隆堂出版 |
| ○ | 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』 | 平成20年 | 東洋館出版社 |
| ○ | 文部科学省 | 『各中・高等学校の外国語教育における
「CAN-DOリスト」の形での学習到達
目標設定のための手引き』 | 平成25年 | 文部科学省 |
| ○ | 投野由紀夫 | 『CAN-DOリストの作成・活用 英語到達度指標
CEFR-Jガイドブック』 | 平成25年 | 大修館書店 |
| ○ | 松川禮子 大城賢 | 『小学校外国語活動実践マニュアル』 | 2008年 | 旺文社 |
| ○ | 小学校英語評価
研究会 | 『小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル
～Hi, friends! 1 & 2 Can-Do リスト試案～』 | 2015年 | 小学校英語
評価研究会 |
| ○ | M. コームリー | 『LD 児の英語指導』 | 2005年 | 北大路書房 |
| ○ | 伊藤嘉一・小林省三 | 『「特別支援外国語活動」のすすめ方』 | 2011年 | 図書文化社 |
| ○ | 橋本正巳 | 『気になる子どもの支援ハンドブックⅡ
～マルチアレンジングサポートのすすめ～』 | 2014年 | 全国心身障害
児福祉財団 |
| ○ | 高梨庸雄・緑川日出
子・和田稔 | 『英語コミュニケーションの指導』 | 1995年 | 研究社出版 |
| ○ | 大下那幸 | 『コミュニケーション能力を高める
英語授業理論と実践』 | 1996年 | 東京書籍 |
| ○ | 樋口忠彦・泉恵美子 | 『続・小学校英語活動アイデアバンク』 | 2011年 | 教育出版 |
| ○ | 鹿児島県総合
教育センター | 『指導資料 特別支援教育 158号』 | 2010年 | |
| ○ | 鹿児島県総合
教育センター | 『指導資料 特別支援教育 168号』 | 2012年 | |

長期研修者〔染川 加奈子〕

担当所員〔川田 耕太郎〕

【研究の概要】

本研究は、高等特別支援学校における知的障害のある生徒のコミュニケーション能力を育む外国語科の指導についての研究である。

具体的には、外国語科の指導目標に即し、生徒に特に必要なコミュニケーション能力を明らかにした。また、生徒の学習上の特性を踏まえて開発した高等特別支援学校版CAN-DOリストを効果的に活用するための授業づくりの工夫について整理し、これらを取り入れた検証授業を実施した。

その結果、開発したリストを生徒と共有し、活用するとともに、授業づくりの工夫を行うことによって、生徒が英語に興味・関心をもち、学習に対して意欲的に取り組み、ジェスチャーなどを用いて「なんとかして」自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿を見ることができた。

【担当所員の所見】

知的障害のある生徒に対する高等部外国語科の目標は、「外国語でコミュニケーションを図る基礎的な能力や態度を育てるとともに、外国語や外国への関心を深める」ことである。社会の中で生きていく生徒にとって、様々な情報や考えを積極的に理解したり、表現したりするコミュニケーション能力は重要である。

本研究においては、「教える側」と「学ぶ側」の2種類からなる「高等特別支援学校版CAN-DOリスト」の開発、活用を通して、「なんとかして相手の話す内容を理解したり、伝えたい内容を伝えたりする力」である方略的能力を育成することの重要性や、生徒の学習上の特性を考慮した指導・支援の在り方を示した。

各学校の外国語科の指導においては、具体的な到達目標をCAN-DO形式で設定し、児童生徒にどのような英語力を身に付け、英語を用いて何ができるようになるかなどを明確にした指導と評価が求められている。開発した高等特別支援学校版CAN-DOリストが、知的障害のある生徒を始めとし、小・中・高等学校の児童生徒への指導の一助となることを期待したい。